

研究・調査報告書

報告書番号	担当
7 3	滋賀医科大学社会医学講座福祉保健医学部門
題名 (原題/訳)	
Effects of alcoholism on coronary artery disease and left ventricular dysfunction in male veterans. 男性退役軍人における冠動脈疾患と左室機能不全に対する飲酒の影響	
執筆者	
Kokolis S, Marmur JD, Clark LT, Kassotis J, Kokolis R, Cavusoglu E, Lapin R, Breitbart S, Lazar JM.	
掲載誌 (番号又は発行年月日)	
The Journal of Invasive Cardiology.2006 Jul;18(7):304-7	
キーワード	
冠動脈疾患、左室機能不全、飲酒	
要 旨	
<p>【背景】</p> <p>多量飲酒は拡張型心筋症と高血圧の原因になることはよく知られているが、冠動脈との関連は十分に理解されてはいない。この研究の目的は患者を対象として、大量飲酒と関連するアルコール依存症の有無により冠動脈の構造と左室機能不全の状態を比較することである。</p> <p>【方法】</p> <p>症例群は 1994 年から 2002 年の間に、胸痛で New York Harbor healthcare System の退役軍人診療所を受診したアルコール依存症の男性患者 100 名である。アルコール依存症の定義は慢性のアルコール性膵炎か肝硬変の既往があることとした。症例と、年齢をマッチングしたアルコール依存でないといわっているコントロール群 (n=200 名) を比較した。対象は全例、冠動脈造影を実施した。</p> <p>【結果】</p> <p>症例群とコントロール群のベースライン時の特性は類似していた。冠動脈疾患の有病率 (冠動脈内腔の狭窄>50%を有意とする) はコントロール群と比較して、アルコール依存群が低かった (アルコール依存群 42%対コントロール群 8%、P=0.013)。冠動脈疾患を有する患者の中では、アルコール依存の既往をもつ症例群がコントロール群に比べ狭窄病変が少なく (1.6±0.6 対 2.3±0.7、P<0.001)、一枝病変が多かった (64%対 8%、P<0.05)。一方、症例群はコントロール群に比べて、左室駆出率 (LVEF) の平均値が低く (43±13%対 49±9%)、左室機能不全の有病率が高かった (LVEF<40%と定義すると 37%対 13%、P<0.05)。症例群では左室機能不全を有する患者でのほうが、左室機能不全を有しない患者より、冠動脈疾患の有病率が低かった (21%対 49%、P=0.006)。</p> <p>【まとめ】</p> <p>胸痛で退役軍人用診療所を受診した男性患者では、アルコール飲酒の方が、冠動脈疾患の有病率が低く、血管造影上の重症度も低かった。しかし一方で、左室機能不全を有するものは多かった。大量飲酒の既往を持つ患者では冠動脈疾患と左室機能不全に間に逆相関の関係が見られた。</p>	